NEWS LETTER

令和３年　月　　日発行
日本生徒指導学会関西地区研究会

日本生徒指導学会　関西地区研究会　第１４回大会

関西発！元気の出る生徒指導
～コロナ禍においてどの子も
取り残さない生徒指導をめざして～

日時：令和３年８月７日(土)
オンライン開催（Ｚｏｏｍを使用）

１　はじめの挨拶

日本生徒指導学会副会長　関西地区研究会会長　新井　肇

新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、第１４回大会はオンラインでの全体会のみの開催となった。本来ならば、分科会や自由研究発表も行うことになっていたが、元気が出るセミナーを拡充することで行いたいと考えている。オンラインでの開催となってしまったが、みなさんの心を合わせ、知恵を出し合い、子どもたちが元気で輝く生徒指導ができるような素地をつくっていく場にしたいと考えている。

２　シンポジウム

◆『コロナ禍における子どもの状況とこれからの生徒指導の方向性』

ファシリテーター　日本生徒指導学会関西地区研究会　会長　新井　肇
シンポジスト　奈良女子大学大学院　教授　伊藤　美奈子
池坊短期大学　副学長　桶谷　守
社会福祉法人飛鳥学院　スーパーバイザー　阪中　順子
大阪府教育委員会スクールソーシャルワーカー
スーパーバイザー　水流添　綾

◎シンポジウムの趣旨

・新型コロナウイルス感染症の流行拡大は、大人のみならず子どもにも平穏な日常を突如奪われた喪失感や閉塞感を抱かせ、休校期間が続いたり「新しい生活様式」を強いられたりしたことが大きなストレスとなった。

昨年１年間に全国の児童相談所が対応した児童虐待の件数が１９万７８３６人（前年比６％増）に上った。本来は安心・安全な居場所であるはずの学校や家庭において、

多くの子どもがストレスを抱えている状況を考えると、コロナ禍において子どもが危機に陥るリスクが高まっていることは想像に難くない。その中で、今、子どもたちがどのような現状にあるのか、その背景には何があるのか、そして、そこに突きつけられている課題をどのようにして克服していくことができるのか、ということについて、「**不登校**」、「**いじめ防止**」、「**自殺防止**」、「**児童虐待**」という４つの視点から、４名の方々に課題提供していただき検討していきたい。

①「コロナ禍での不登校の現状と課題」

奈良女子大学大学院
教授　伊藤　美奈子

◎コロナ禍における学校

〇突然の一斉休校から始まり、不安の中での学校再開により、学習の遅れへの対応、行事の削減、ソーシャルディスタンスや黙食、マスクによるコミュニケーションの不安などの課題が見られた。
子どもも不安、親も不安、教師も不安、社会全体の閉塞感やイライラが弱者（子ども）に反映されていく現状が社会全体にあるように感じる。

◎３つの調査の紹介

①兵庫県**「コロナ禍における不登校支援に向けて」**（２０２０年１１月調査）

☆不登校タイプの抽出（小学校５年 552 人、中学１年 1,327 人、2 年 1,364 人）
「現在登校群（2,983 人）」、**「新規不登校群**（190 人）」、**「継続的不登校群**（70 人）」の 3 つのタイプに分けて学校が休校中、再開時、現在の生活と気持ちについて回答してもらった。

☆休業中（Ｒ２年３～５月）の比較

・「規則正しい生活を送っていた」⇒登校群は休業中でも比較的、規則正しい生活を送っていたが、不登校群はあまりできていなかった。
・「長時間のメール・ゲーム」⇒登校群はメールやゲームの時間は比較的短かったが、不登校が長引くにつれて、メールやゲームの時間も長くなった。
・「登校できない不安」や「家にこもる不安」⇒登校群は登校できないことや家にこもることに苦痛を感じているが、不登校が長引いている群ほど、不安は低くなっていた。

☆学校再開時（Ｒ２年５月末）の比較

・「登校できる嬉しさ」、「家にこもらなくていい嬉しさ」⇒登校群には比較的嬉しいという意見が多かったが、不登校群には少なかった。
・「分散登校の嬉しさ」⇒登校群よりも、新規不登校群において高かった。継続的不登校群の反応は良くなかった。
・「コロナや行事の不安」⇒登校群が高く、不登校群が低かった。
・「学業不安」⇒学校再開後、一番不安に感じていたのは新規不登校群であった。現在登校群は少し、継続的不登校群は多少感じていた。

☆現在（Ｒ２年１１月）との比較

・「規則正しい生活」⇒登校群は、休業中に比べ大きく改善できていたが、不登校群は休業中と大きく変わらなかった。
・「長時間のメールやゲーム」⇒登校群は短くなったが、不登校群になるにつれて長くなっている。
・「学校が気になる」⇒１番高かったのは新規不登校群であり、継続的不登校群は低かった。
・「コロナや行事が気になる」⇒休業中と同じく登校群は高く、不登校群が低かった。
・「学校が楽しい」⇒大きな群間差があり、登校群は学校が楽しいと感じている児童生徒が多く、不登校群は学校が楽しくないという回答に偏っている。

☆不登校３タイプの休業中と現在の比較

・「規則正しい生活」⇒現在登校群と新規不登校群では、休業中に低かったものの、現在は高くなっている（メリハリがある生活）が、継続的不登校群は休業中も現在も生活にあまり変化はない。
・「長時間のメールやゲーム」⇒現在登校群と新規不登校群では、休業中に高かったのが現在は低くなっている。継続的不登校群も時間は減ってはいるが、有意差はなかった。

以上の調査より

◇登校群・・・メリハリが大きい。一斉休業になった時は不安だったが、学校が始まると学校に行ける喜びに変わっていった。
◇新規不登校群・・・分散登校に適応的だったが、その反面、勉強への不安も抱えていた。
◇不登校群・・・一斉休業という非常事態にもあまり大きな変化はなく、登校への評価も楽しいという思いも低かった。

②通信制高校における調査結果（２０２０年６月調査　高校１年生 1,317 人対象）

☆コロナ休校中の通信制高校の生徒の気持ち（不登校経験あり、なしで比較）

・「早く学校に行きたかった」⇒不登校経験ありなしに関わらず高かったが、不登校経験なし群の方がより高かった。
・「通学や身支度をしなくていいので楽だった」⇒この気持ちも不登校経験ありなしに関わらず高かったが、不登校経験あり群の方がより高かった。

☆不登校経験の有無による教育活動への評価

・不登校経験あるなしに関わらず、オンラインの教育より対面の教育の方が、評価が高かった。特に、「学校に登校すること」、「友達に会えること」、「先生に会えること」、「対面授業」などの評価が高かった。不登校経験がある生徒は、ない生徒に比べて、オンライン教育の「オンライン面談」、「オンラインホームルーム」、「オンライン授業」の評価が高かった。

以上の調査より

◇不登校経験のあるなしに関わらず、学校に行きたい気持ちと、休みで楽だという気持ちは両方ある。しかし、不登校の経験がない生徒は、学校に行きたい気持ちが有意に高く、不登校の経験がある生徒は、学校に行かないのは楽と考えがち。
◇両群とも、オンラインより対面授業の方がより高く評価する傾向にあったが、不登校経験のある生徒はない生徒に比べ、相対的にオンライン教育への評価が高かったので、不登校支援としてオンラインの教育が突破口の一つになるのではないかと思われる。

③大学生対象の調査（2020 年 5 月調査 1 回生 390 人、２～４回生 830 人、院生 234 人）

☆学年×居住形態による比較（生活と授業）

・「大学生活に対する不安」⇒１回生の実家生、下宿寮生ともに高く２回生以上になると、実家、下宿寮ともに低くなる。
・「対面授業希望」⇒１回生の実家生、下宿寮生ともに高く、２回生以上になると低くなる。
・「遠隔授業評価」⇒１回生であっても２回生以上であっても、実家生であっても下宿寮生であっても、それほど差はない。

☆学年×居住形態による比較（ストレス）

・「不安いらいら」⇒学年を越えて、下宿寮生の方がストレスが高い。
・「無気力」⇒学年を越えて下宿寮生が高い。１回生より上の学年に多い。
・「身体不調」⇒学年を越えて下宿寮生が高い。

以上の調査より

◇大学生活への不安や対面授業の希望は２回生以上より１回生の方が強い。
・新入生⇒大学そのものへの不安にプラスしてコロナへの不安、４月に行われるガイダンスも不十分であったことで、大きなストレスを抱えやすかったといえる。
◇ストレスは、実家生より下宿寮生の方が強く抱えている。
・下宿寮生⇒実家にも帰れず、友だちにも会えず、アルバイトにも行けない。
以上より、コロナの影響を強く受けるのは新入生と下宿寮生である。

◎コロナ禍と不登校

〇さまざまな不登校

・休業状態から日常に戻れずに不登校に・・・
・分散登校や少人数登校では登校できたが通常登校で不登校に・・・
・stay home が家族のマイナスな人間関係をあぶり出し不登校に・・
・部活動がなくなり、学校へ行く意味を失ってしまい不登校に・・・
・学校に行かなくても卒業できるならと考えてしまい不登校に・・・

↓

コロナ禍による社会の変化を受け、不登校もますます多様化、
特に「節目の学年」と、「絆の無さ」が不適応のリスクでは？

②「コロナ禍のいじめ問題をどう考える」

池坊短期大学
副学長　桶谷　守

◇　令和３年８月現在、新型コロナウイルス感染者数が日本で１００万人を超える中、児童生徒のコロナ感染者数も１年間で２万６０００人余りになっている。一昨年度３月に学校が臨時休校を行い、６月から分散登校や短縮授業を行うようになり、児童生徒や保護者の「**感染に対する不安**」や「**感染防止対策下のストレス**」が高まった。また、学校特有の不安・ストレスも生じた。

具体的には・・・

- ・休校や進路に対する不安
- ・学習の遅れを取り戻すためのストレス
- ・コミュニケーションが制限されることへのストレス
- ・行事、部活動が制限されることへのストレス
- ・年度当初の学級集団づくりなどの集団形成ができなかった

等があげられる。

◎　感染者等に対する偏見や差別への対応

〇感染者、濃厚接触者とその家族、感染者の対策や治療にあたる医療従事者や社会機能の維持に当たる方（エッセンシャルワーカー）とその家族等に対する偏見や差別につながるような行為は、断じて許されない。

具体的な偏見や差別には・・・

- ・「コロナにかかっている」とからかわれた
- ・咳をしただけで周囲の子どもたちが避難する
- ・医療従事者やその家族に対する偏見や差別

等があげられる。

〇厚生労働省の資料によると、「新型コロナウイルス関連の差別や誹謗中傷を学校現場で見たり聞いたりしたことはあるか？」との質問に対し、

- ・咳、発熱、欠席者に対して「コロナだ！」という
- ・保護者の言動が差別や偏見を助長している
- ・地域社会や近隣住民からの差別や偏見
- ・ＰＣＲ検査を受ける＝新型コロナウイルス感染者と蔑視する

等があげられた。

◎　長崎県の学校教職員へのアンケート調査の分析

〇「臨時休業期間中から臨時休業明け直後の子どもたちの状況について当てはまるもの」の上位５つは

- ・生活のリズムが乱れた子どもがいた
- ・運動不足の子どもがいた
- ・学校生活への意欲が低下している子どもがいた
- ・学習や学力に不安を抱えている子どもがいた
- ・登校を苦痛に感じている子どもがいた

等があげられた。

○「これからの学校教育についてあなたが特に不安を感じているもの」の上位５つは

・学校行事をどうするか ・学級、学校内で子どもたちの健康、安全をどう保持するか ・学校はますます多忙化していくのではないか ・子どもの中に感染者や濃厚接触者が出るのではないか ・学校のオンライン化に対応できるか

等があげられた。

↓

このような状況が教育現場の中にある

◎『なぜ子どもは「コロナいじめ」をするのか？』

○**いじめ衝動**（いじめる側の子どもの心理）と**いじめターゲット**に**いじめ許容環境**がプラスされると**いじめが起こる**。いじめ衝動には、満たされない権力欲や傷つきやすい自己愛、人間関係の不安、わがまま、ストレス発散などがある。いじめ許容環境には、特にコロナ禍においては、コロナ感染者を排除しようとする大人社会の雰囲気があげられる。

◎「キモい」という言葉

○１９９０年代以降、若者言葉として流行りだし、現在は日常語として使われている。この「**キモい**」という言葉は、差別や偏見、いじめのシーンにおいて使われることが多いが、この言葉や感情は、現代社会をネガティブな方向へと突き動かす巨大な動力源のひとつになっているのではないか。
そして、「キモい」という言葉は、単なる悪口というだけでなく、排除と迫害を正当化するような響きさえ帯びていると思われる。

③ 「コロナ禍での児童生徒の自殺の現状と課題」

社会福祉法人飛鳥学院
スーパーバイザー　阪中　順子

◎中・高校生の自殺者数と自殺率の推移（資料）

○８５年より、中・高校生の自殺者数と自殺率は増加傾向にあると言える。
とりわけ大きく自殺率が上昇している年は、いじめや著名な人の自殺報道があったときと重なる。昨年は一昨年より、１００人増加している。思春期の子どもたちは、周りの死や死の報道、社会の不安などに影響を受けやすいことがわかる。

◎児童生徒の月別自殺者数の推移（資料）

○今年度１月～５月までの数字を見てみると、昨年以上に高止まり傾向にある。
コロナ禍にある様々なストレスが影響しているのではないかと考えられる。

○令和２年度の学校再開時の６月、長期休業明けの８月のときに自殺者数が急増

している。４０年間の調査で９月１日が突出して自殺者数が多いと報告されているが、昨年は２学期開始が８月下旬になったことが影響していると思われる。

〇国立成育医療研究センターの調査（学校休校時、再開時、９月～１０月の３回調査）によると、**７歳～１７歳の子ども全体の７３％にストレス反応や症状**が見られた。２０２１年２月～３月の第５回調査では、「身体的健康は全年齢群で以前よりも低い結果、精神的健康は中高生では以前よりも低い結果」となった。

小学４～６年生の１５％、中学生の２４％、高校生の３０％に中等度以上のうつ症状があった。

小学校４年生以上の子どもの６％が「ほとんど毎日自殺や自傷行為について考えた」と回答した。

◎令和元年度及び令和２年度における児童生徒の自殺の原因・動機

〇上位６つを見ると、学業不振、その他進路に関する悩み（学校問題）、親子関係の不和、家族からのしつけ・叱責（家庭問題）、病気の悩み・影響（その他の精神疾患、うつ病）（健康問題）があげられる。

↓対応策として

・わかる授業、学力だけでない物差し→**安心安全な学校風土**
・心の不調の理解と対応
・安心感の持てる家庭環境

◎生き心地の良い町（生き心地の良い家庭・学校）

この自殺率の低さには理由がある：徳島県旧海部町

↓

・いろんな人がいてもよい⇒いろんな人がいたほうがよい
（凝集性と多様性のバランス）
・緊密すぎない、ゆるやかにつながる⇒誰でもあいさつ
（関心はもつが監視はしない＝繋がりつつもしばらない）
・人の評価は多角的に、長い目で⇒学力だけでない物差しを
（職業、学歴、財力とかではなく、人柄や問題解決能力で評価）
・どうせ自分なんて、と考えない⇒自己信頼感・効力感の高さ
（誰にでも必ず何か出来ることがある）
・病、市に出せ⇒弱さを出しやすい環境、援助希求能力の高さ
（悩みを早めに大っぴらにすることで誰かが助けてくれる）

↓生き心地の良い町は生き心地の良い　家庭・学校につながる

すべての子どもたちの「**こころの危機**」、「**いのちの危機**」をしのいだり、乗り越えたり、支え合ったりできる力をどう培うのか。

↓

未来を生き抜く力を育む（自殺予防教育）

その中でハイリスクな子どもへの対応はどうしたらいいのか。

↓

個別支援、役割を決めてチームで対応

◎自殺の危険の高い子ども

・両価性（生と死の間で揺れ動いている）
・衝動性（自殺衝動は長く続かない）
・柔軟性を欠いた思考

↓

死にたいくらい辛い・・もし、その辛さが和らぐのなら、**ほんとは生きたい**

◎希死念慮への対応

『「死にたい」って言っちゃダメ！』などとは言わない！

ほのめかさないよりも、援助関係が続くことが大切。
「死にたい」と言える関係性が大事
「死にたい」の向こうにある「**見えない困りごと**」を考える。

〇コロナ予防：ソーシャルディスタンスを保つ
いじめ防止：ゆるやかであたたかな距離感
自殺予防　：弱音を吐ける「絆」が必要

↓

そのためには**監視をするのではなく関心を持ち合うこと**が大切

孤立は「自殺」のキーワード　絆と気づきは自殺予防の第一歩

④ 「コロナ禍での児童虐待の現状と課題」

大阪府教育委員会スクールソーシャルワーカー
スーパーバイザー　水流添　綾

◎令和元年度に児童相談所が児童虐待相談として対応件数⇒193,780 件で過去最多を更新し、年々増加している。この数字は児童相談所が指導や措置等を行った件数で、実際にもっとたくさんの児童虐待がある。

◎内容別件数を見ると、令和元年度は**心理的虐待の割合が 56.3%**で最も多い。夫婦間暴力や面前ＤＶなど、子どもたちは、生活の中で暴力を目にしている。
次いで、**身体的虐待（25.4%）**、**ネグレクト（17.2%）**、**性的虐待（1.1%）**となっている。

◎児童虐待相談対応件数の動向（令和 2 年 3 月～令和 3 年 2 月）を見ると
・休校措置がとられた 3 月は前年同月より 18%増だった。
・4 月 5 月はそこまで対応件数は増加していないが 6 月は前年同月より 12%増。
学校が再開した 6 月に増加しているということは、子どもたちの様子を確認できたときに増加⇒コロナ禍で虐待が見えにくい状況になっている。

◎児童虐待件数増加の背景にあるもの（コロナ禍以前）

保護者の要因	養育環境の要因	子どもの要因
保護者の精神疾患	経済的に不安定	未熟児
保護者の知的障がい	地域で孤立・差別	障がい児
被虐待体験者	ひとり親家庭	育てにくい性格
実家と関係疎遠	転居して間もない	双子などの多胎児
望まない妊娠	面前ＤＶ	発達遅滞
10 代で出産	ステップファミリー	

〇虐待が子どもに与える影響

・**自己肯定感の低下**⇒日常的に否定をされ続けている。

・**不適切な関わりの学び**（暴力・支配の関係など）

・**愛着の課題**（人間関係の構築の困難さなど）

↓これまでの背景にコロナ禍の状況が加わると・・・

〇保護者の要因⇒見通しの持てない毎日、先行き不安による精神疾患の増加
緊急事態宣言などによる実家との往来が困難、疎遠
在宅生活時間の長さによる夫婦、家族関係の乱れや変化
不安、寂しさ、居場所探し等による若年出産の増加

〇養育環境の要因⇒職の喪失等による経済状況の変化
密を避けるため、保護者交流、地域交流の喪失
ひとり親家庭の貧困、孤立が加速
家庭内におけるパーソナルスペースの確保困難による
いら立ち、衝突などによる家族関係の変化
牙の矛先が弱者へ向かいがち（子どもにあたる親）

コロナ禍で、見えにくいさまざまな家庭背景により、児童虐待がさらに増加につながる可能性が浮き彫りになっている。

◎子どもの環境の変化

〇学校環境⇒突然の休校、時間割の変更、マスクの着用、手洗い、消毒、行事の変更、友達との距離感、クラブ活動の縮小など

〇家庭環境⇒保護者やきょうだいの在宅時間、パーソナルスペースの減少、家族の距離感、衣食住の変化、役割の変化（ヤングケアラーの課題）など

〇地域環境⇒お稽古、スポーツクラブ等の閉鎖、公園遊び、外出自粛による社会視線の変化、家族の外出先の閉鎖、自粛など

実生活の中での窮屈さ、発散場所の喪失、居場所の喪失、イレギュラーな日常心配不安、失望、無気力、苛立ち、孤立感、ゲーム、ＳＮＳ依存など、子どもたちのストレスが親のストレスになり虐待へと繋がっていく。

◎コロナ禍の虐待によるさらなるリスクと二次被害

〇例えば・・・

		甘い誘惑、危険な人や場所との接点
・居場所探しによるリスク		家出、金銭の持出し、万引き、喫煙飲酒
・現実逃避によるリスク	⇒	性被害、望まない妊娠
・自暴自棄によるリスク		ゲームやＳＮＳ依存、薬物依存
		リストカット、自殺、薬物乱用

心身（脳）のダメージによる判断能力、行動抑制力等の低下が命を脅かす！

◎コロナ禍において児童虐待の未然防止、早期発見

◎児童虐待から子どもを守るためつながり合う関係づくり

〇子どもと家庭を支える役割は学校、先生だけではなくＳＣ、ＳＳＷをはじめ、地域のさまざまな機関が網の目のように関係を持ち、児童生徒を支えていく関係を構築

①安心安全環境の整備⇒物理的環境整備・・・経済困窮への支援
サービス利用支援
居場所づくり支援
ソフト環境整備・・・信頼関係の構築
相談できる場の提供
情報提供、資源紹介
つながりづくり

②子どもへの働きかけ⇒〇子どもの権利保証についての意識づけ
・守られるべき存在であること
・助けてと声をあげていいこと
・楽しむ、学ぶ等の権利があること
〇見守りの具体化
・声をかける、変化に気づく、気持ちを確認する
・情報を提供する
・ココロとカラダ（物理的）の居場所をつくる

していくことが必要。子どもたちの成長発達を守る意識を高める。

３　討論会

☆新井先生：コロナ禍の中で見えてきた、学校が持っている意義とは？

〇伊藤先生：不登校の子どもたちにとって、一斉休業により休むことが正当化されたような時期から、また登校を自明とする価値観が戻ることでしんどさが蘇ってきているように感じる。確保法では、学校に登校することが全てではないが、不登校の子どもたちは、学校（登校）に対して屈折した思いを持っている。
オンラインもいいが、対面の教育活動では顔と顔を合わせて、ときに人間関係でぶつかることもあるが、成長の場も提供している。不登校支援としてオンライン教育の新たな可能性を探りながら、学校の対面の意味、関係性を築いていく学校の意義を見直す必要がある。

〇桶谷先生：「キモい」という言葉が人を分断する、排除への動きになる。
人は人に傷つき、人に癒やされる。
先生の役割は知恵と知識を教えるとともに、人との関わり方を教える。集団の中で生活することで、人の痛みをわかり、人の心を理解する環境をつくる。子どもたちの判断力や価値観、これからの世の中をつくっていく世論の形成について学校の意義が見直される。

〇阪中先生：コロナ禍で、こんなに自ら命を絶つ子が増えた。学校は福祉的な役割も果たしてきたのではないかと改めて思う。行事等があることで、人間関係が豊かになったり、日々の何気ない繋がりや先生方のちょっとした声かけや関わりで、子どもたちが癒やされたり救われたりしていたことが再確認された。

〇水流添先生：さまざまな環境にある子どもたちにとって、学校はどの子にも平等な学びの場を与えることができる。学校に来ることでさまざまな人と関わりを持てる。閉塞感がある子どもたちが、学校に来ることで世界観を広げ、それが生きる力に繋がっている。
義務教育の中で、どの子も繋がれるということが大きな意義。

〇新井先生：学校は平等な学びの場、所属の場であるということ、コロナ禍において、改めて学校の意義というものが再確認されている。

☆新井先生：コロナ禍のピンチの中で見えてきたチャンスとは？チャンスをこれからの生徒指導にどのようにしていかしていくか。

〇伊藤先生：ＩＣＴを使った教育や少人数、分散登校が合う子どもたちがいることがわかった。今までの学校の枠ではなく新たな形を模索しながらやっていくことが求められる。また、学校の環境差が見えたことは課題。支援者（先生や保護者）を支える力、グチを聞き合える関係作り、先生たちが疲弊しない環境作りが大事。

〇桶谷先生：コロナ禍において、人が不安に思うことがピンチだと思う。
いじめは休校中に起こっていない。人と人との距離感、物理的距離感と心理的距離感の間合いを学校教育の中で教えていけるのではないか。

〇阪中先生：コロナ禍以前に、マスクを着け続ける子どもがいたが、コロナ禍でその子どもの気持ちが理解でき、様々な子どもの立場を改めて考えることができた。自殺予防で言えば、対面で相談できない子が、ＳＮＳが充実したことで相談できるようになった。ＳＮＳの充実と、それを対面につなげることが大切。

〇水流添先生：ＳＮＳ、オンラインによって、対面では出しにくかった自分の気持ちが出しやすくなった。オンラインでＳＯＳが発信できたり、子どもたちの声を引き出したりするきっかけとなった。

〇新井先生：４人の先生方の話を聞いて、人との関係性をどう築いていくのか、人との繋がりをどうつくっていくのかということが改めてコロナ禍の中で問われたと思う。元気が出る生徒指導の根底にあるのは、先生と子ども、子ども同士、先生と保護者、この関係性をどう築いていくかのかというところに大きな手がかりがあると感じた。

４　森田洋司先生を偲ぶ会

◎新型コロナウイルス感染症の蔓延により、延期を余儀なくされていた、森田洋司先生を偲ぶ会がオンラインで行われました。日本生徒指導学会会長の八並光俊様はじめ、多くの方々から、生前の森田洋司先生の功績が語られました。